

# 体育社会学についての一考察

山 田 是 明

## 一、体育社会学

体育社会学とは、体育の事実や、問題を、社会的な角度から見、その合理性を高めようとする科学である。また社会学の態度、理論方法をもって、その成果を体育の進歩と改善に役立たせる、それらは実践的意味を持つ。

体育を教師と教育の観点からとらえられた教育社会学の一領域、一分野である。(スポーツやレクリエーションをも含む)

現在、国際的にも、スポーツやレクリエーションの社会学が自覚され、発展し、「国際社会学委員会」が、一九六四年成立され、スポーツ社会学の、国際的研究の発展となる。フランスの社会学者J・DUNAZEDIE・Rの見解は、スポーツ社会学の中で、教育としてのスポーツを取り扱うのが、体育社会学である、と云っている。

体育社会学についての一考察(山田)

我が国における体育の社会学的研究の歴史は第二次世界大戦後に始まり、その研究は二つの要因から成る。

(一)諸科学の発達、特に社会学と教育社会学

(二)体育、スポーツの普及発達

戦前の教育研究は全体主義国家のもと、思想的統制下で、教育研究は主として、ヨーロッパの観念論的教育思想と教育技術の研究。

戦後の教育研究に多大の影響を与えた書物は、宗像誠也「教育研究法」一九五〇年河出書房の中で三点が上げられている。

(一)日本の教育の現実を対象にする事。

(二)教育の社会的機能の究明につとめる事。

(三)客観的たるべき努力する事。

(科学としての教育学樹立の為の章の中)

体育や、スポーツは、一九四六年第一回国体より、国内外の大会での活躍は戦後の国民に明るい希望と復興の

## 体育社会学についての一考察（山田）

精神を育て、選手、国民、地域、住民に、スポーツの大衆化いわゆる「社会体育」となり政策的にも行政的にも推進され始め、体育研究は社会変化に伴う、全体社会や地域社会の体育スポーツの必要や要求に応じた計画作成する分野が必要となる。

### 二、人間のとらえ方

「人間は社会的存在である」と云う規定から見ると「体育が人間の成長発達、心身の調和的発達を助成する」目的があり、目標は「身体的発達を促して、全人類的調和発達に貢献する。」と社会的存在としての人間の発達を通して、人間社会の発達に対して、何らかの関係を持つものと見る事が出来る。

従って、体育からの結果が、人間社会の発達と、どんな関連を持つかについて考える事が出来る。

その場合に、体育と社会の関連については、体育の現実を対象にして、その説明をもたらす。体育を教育の領域において捉え、社会の発達に寄与するならば教育社会学の立場より、体育と社会の発達について、研究する事が出来る。

### 三、体育の現象と社会学の立場

体育は本来人間生活において見られる現象であるが、場所的な制約を受け、大いに異なる。即ち、家庭、学校、農村、漁村、都市などの地域的区分によって異なる生活条件が考えられる。

体育が学校以外の一般社会の形態や条件により、学校での体育事情とは、著しい相違が見られ、それらは異なる体育的現実を持つ、即ち、体育として見られる現象が、場所的、環境的、地域的、あるいは風土的に合っており、それらが社会的な相互的関連を持ち、影響の仕方をしていくかが考えられる。

その様な場において見られる現象の中から、人間の個人的側面でなく、社会的側面についての発達をも考えられる。

体育事実とは特定の体育に関連のある集団内に生起する、集合的・客観的事実として、成員に外在的拘束を加える固有の存在を持つ。この事は文化人類学で用いる文化と云う概念に、置き換える事も出来る。

体育事実の必要条件を考える。例として、体育教師、生徒、学習集団、目標、施設、用具等であり、その中核

は、教師と生徒との間に交わされる体育の内容とした、相互作用で展開し、内容伝達を効果的にするのが、施設、用具、学習者の集団、指導法が必要となる。学習者は、学校以外の社会集団とも関係している。その集団は、家族集団、近隣集団、遊び仲間、子供会、ボーイスカウト、ガールスカウト、地域社会のスポーツ関係団体等あり、この学習者を集団との関連に於いて、とらえる所に社会的側面がある。

#### a スポーツ振興法第七条

地方公共団体は、広く住民が自主的、かつ積極的に、参加出来るような運動会、競技会、運動能力テスト、スポーツ教室等のスポーツ行事を実施する……以下略

体育の目標は、教師が個人的に決定しうるものでなく、社会に於いて正当と認められ、社会とも適合している者である故、体育の目標は社会との関連である。

### 四、体育の機能と社会の発達

体育は、人間成長発達について、身体及び身体活動により企図される所の教育である。

教育の機能は社会の未熟者を、成人そのままに、形成する事でなく、教育が未成熟な成員に文化を伝達し、社

体育社会学についての一考察（山田）

会的な人間形成を行ない、その文化の選択淘汰の機能を持ち、単に伝達ばかりでなく、文化の創造の基礎となる。教育はすぐれた成員の形成により、社会の進歩と改造に寄与する。

体育の機能は、本来人間個人の発達に向けられた、教育的機能と考えられがちと見られたが、人間社会において、個人と社会は相即不離の関係にあるので、人間の発達は個人の発達だけでなく、社会の発達に深い関連を持つ。

社会改造の機能は教育のみの機能ではない、文化の伝達も社会成員の統制も、関連を持つことに意味がある。

体育は、身体的側面を契機として、人間教育に参与する領域である故、体育は教育として社会改造の機能を果たすべきである。

それは社会の基体とし、身体に関してのみでなく、それを根源とし、発する人間活動の社会的側面において、社会改造の機能を果すものである。

体育は未成熟な社会の成員に、運動文化を伝達し、社会的な人間形成を行う。

社会改造の動因とは、社会を発展させる根本的な力、原因を意味する。

## 体育社会学についての一考察（山田）

自然的動因（地理的・環境的・生物学的）

社会的動因（技術・生産関係・経済成長）

心理的動因（知性・イデオロギー・社会的性格）

社会の発達、社会の改善と進歩である。社会の改善は、ニクソンとイトンズも云っている様に「社会を構成する個人の身体的、精神的、及び社会的な資質の改善によるものである」。社会の進歩に関連し、教育が最高の重要性を持ち、学校における社会教育の重要性が現実化され、体育においても、社会体育が重要視される様になり、社会体育指導員配置もその一つの現れである。（スポーツ振興法第十九条）

以上の如く、体育が社会改造と進歩に役立つ教育の機能を持つものとなり、体育も教育も社会の発達に貢献しうる。

## 五、体育に於ける特性

### （体育活動の社会的効率）

体育が、身体諸器官と機能の発達を目標に行われる時、個人の運動に対する興味により、適度を実施、その目的に行う事が出来る。ところが、身体活動が他の人と共に行われたり、その目標が個人を越えた社会をより良

くする目標に行われた場合、体育における社会的効率を獲得する目標についての認識が必要である、人間は決して単独で生活出来ない。人間が人間らしい生活をする為の社会環境に適応する事が必要である。

マバロンの野性児は少しも人間らしさを身につけていなかった。歴史的、社会的に異った文化環境に育った音楽を理解する事は不可能に近いと有名な音楽家は云っている。

個性、人格の文化的背景の根深さを物語る例である。適応し、楽しく豊かな生活に必要な社会的資質や能力を含めて人間の精神的根源となるものを社会的効率と呼ぶ。

人間の社会生活では、楽しい事ばかりでなく、苦難な道を歩んで初めて、楽しい人生経験を得たと云う事もある。苦難を克服する勇気や自制心、持久力や協調性などを必要とする。火は熱い等、経験こそ、その実相の事実を知る事が出来る。

身体活動の諸経験から、人間が社会生活をする上に良く、その生活環境に適応して行く人、個々の資源を発達させる。

体育的経験から、この個人的資源を獲得して行く事が

肝要である。個人的資源は「オーバートイフル」は、それは安定感、情緒的統御、活動性、自己評価、創造的表現、及び反射的思考をなす能力を指している。

a パーソナリティ 発達の集团的系譜

人間はこの世に生まれ出てより、さまざまな集団生活を遍歴する。家族、仲間、集団、学校、職場、各集団等（家風、平等な仲間内のルール、校則、契約）スポーツ集団の派生する基盤は、地域、学校、職場等スポーツに関する理解度が高いほど傾向が著しい。しかし参加は自発的、反復的、忘我的傾向が強い。

## 六、クラブ（運動部）

クラブは目標に対する共通理解、社会的な結束、社交性への欲求が成員間に存在している自治的組織である。

学校に於いては、児童生徒の自主的活動を通して、個性を伸ばし、社会性を養い、健全な生活態度を育て、心身の健康の助長を図ると云う目標におき、昭和四十六年度から小学校四年生以上、四十七年度、中学校、四十八年度から高等学校と「必修クラブ活動」とし、全員参加のもと、実施される様になった。

やがて、学校の代表としての役割や、期待をおわさ

体育社会学についての一考察（山田）

れ、名譽の為や、勝利至上主義の方向になる。

a 地域社会スポーツクラブ

地域社会における、スポーツ集団は、運動広場や、スポーツ施設確保が難かしくなるとか転勤、結婚などによるメンバー移動等の社会変化の影響を受け、スポーツ集団の崩壊を招く事が多い。（中島豊雄の愛知県軟式野球連盟の加盟チームの存続崩壊の研究）

地域スポーツ集団の存続と崩壊に働く、外部的条件として、(一)集团的基盤、(二)強力なリーダー、(三)施設、(四)組織、大会を抽出している。

b クラブ活動と社会的効率

体育のクラブ活動は、特別教育活動で、何れのクラブでも機会均等、個人の自由意志により選択し、参加する事が出来るが、クラブには、各クラブにより決められた規則がある。それは、人間が社会生活をする上に決められた規則と質においては、変らないものである。

従って、個人の自由意志も、所属するクラブの規則によって、個人の行動に制約を受ける事は当然である。クラブの成員は、同じ目的を持ち、同じ運動を愛好する者であり、共に技能を伸ばそうと努力している者達の集団であるから、成員は多く共通した研究の領域を持つこと

になり、協力する事が可能である。時には專制的なクラブ運営にも甘んじ、全体の総合的力を發揮する場合もある。

安定した強い立派なクラブを建設するには何よりも、そのクラブのモラルを確立し、それを相互に高めて行く心掛けが大切な事で、それには、内的不均衡を生じない、人間關係を作らなければならない。即ち、クラブの活動が、民主的、親和的、協力的な方法に運営されなければならない。この様な民主的な人間關係から、立派なクラブが形成され、立派なスポーツマンや、人間的に立派な人を輩出するのである。

以上によって理解される様に共通な体育活動を愛好するクラブは、技能を十分に練習する機会を持つ。従って、自己の技能を磨き、クラブ活動の生活にも適応し、人間的な習練をする上、好都合の機会を与えるのである。

まず、クラブ活動により、心身共に必要な動的健康を確保し、プレイを通じ、持久力や自制心や正義感とか、協調する態度、責任感や、勇気などの人間社会における、生活に必要な、根源的資質とも云うべきものを、涵養する事も可能である。又、クラブ員の親睦交友の中

で、叱咤激励とか相互扶助の精神が生かされねば、身体活動による指導も、十分にみのる事が出来ないであろう。

クラブ活動における練習と指導は、常にその効果を期待する上に重要な契機でなければならない。

## 七、運動文化の概念

生物は、生活環境に適応して生存し、外部環境への適応の方法を見ると、第一に道具の製作、第二に社会生活を行う事により、人間行動を律する種々の風習、制度、道徳、法律等が成立し、第三に娯楽、知識、宗教、芸術等作られた。一般に人間行動は、文化によって、規定されると云われるが、二つの見方がある。

(一)ドイツの文化の概念は、文化を精神的理想的価値の実現にあるとして、哲学、宗教、科学、芸術など精神的所産を意味する、精神的伝統の中より生まれるもの。

(二)英米的文化の概念は、知識、信仰、技芸、道徳、法律、および他の能力や、習慣を含むものとして、包括的にとらえているもの。

クラック・ホーンは、「一つの文化とは、一集団の全集員、あるいは、時に指定された成員があずかる傾向の

ある、あからさまな、あるいは暗黙的生活様式の歴史的体系」であると云っている。

#### a 運動文化

身体運動の発生は、人間が環境と斗い、それを克服し、それに適応して行く過程で、人類の歴史と共に現われて来た。

身体活動がある目的意識を持ち、理想的主体的立場をもって、社会生活の関連の中で、機能するものとなった時に、運動文化と云える。浅井氏によれば

(i) 人間が環境に適応する過程において、身体活動が社会的要求に従って、変化発展した。

(ii) 人間の目的意識が発達して来るに従い、理想を持ち、生活に実践されるもの。

(iii) 新しい価値の創造により、更に発展し、社会の形態に適応し、社会的、歴史的存在となる。

(iv) (サビーア)メンバーに生き生きとした価値あるものとしての実感を持たせ、これを正しい形で作りあげる時、社会生活そのものを、正しく、進歩する様な機能を持たなければならない。

この様に考えると、運動文化は、時とか、場所とか、歴史的、社会的な存在の拘束を受ける。それが集団の

体育社会学についての一考察(山田)

意識を強固にしたり、集団の存立を危くする場合もある。

例えば古代ギリシャのアテナイでは、人間性の尊重から身心の調和的発達を身体運動の目的とした。スパルタでは身体運動が戦争の為の手段となる。古代ローマでは、スポーツは見るものと化し、不健全なものとなる。

中世では禁欲主義的立場から、身体は欲望の源泉とし、悪なるものと考え、自発的な身体運動は行われな

#### b 運動文化の宿命

現在の資本主義体制に於いては、スポーツが見るものとして企業化され、利潤の対象として与えられる。安易な情緒的楽しみを、与えるスポーツの愛好者となり、勝敗にこだわり、プレーヤーの人間の言動を報じ、情緒的な満足を与える。

行方スポーツと云う、創造的喜びを持つ、身体運動は影をひそめ、スポーツは一部の人々だけのものとなり、スポーツを見て楽しむ、かたよった運動文化の愛好者となって行く。

大衆は運動文化の面においても、人間性の向上に相反する。疎外的状況に落ちいる。そして孤独化し、情緒化

しつつあることは、精神的にも、肉体的にも、集団の凝集力を弱め健全な社会の妨げになる。大衆が目的意識を持って、身体運動に参加する事により、運動文化の否定的側面を克服し、それが、真の人間性の向上に役立つ。現在の危機は、個人主義化し、自由放任にあると云える。

集団に対する尊敬の社会意識などが、今こそ強く要請される時である。

## 八、体育の文化

体育を、文化として捉える必要性は、まず運動を文化の内容として、考え直す事にあり、さらに体育を社会における一つの仕組として捉え直す事である。

この文化の存在形態、社会的諸条件との関連、社会的機能が側面となってくる。

社会変動と体育の問題は、社会的諸条件との関連で、体育の文化の存在形態、社会的機能を捉える。それらは又、経済制度、政治制度、宗教制度等とも、相互依存関係にあり、社会の維持存続にも影響される。

体育はどの様な面で文化として捉えられたか、二本足の歩行から、高難度の数多くの運動は、人間の学習によ

る。人間はまず動く事から学習し、動いている学習をする。この学習としての運動は長い歴史の中で作り、工夫し、淘汰して来た社会的遺産としての文化に他ならない。

体育は身体の運動の問題を解決する為に、人間によって、工夫され、考案され、選択された運動を内容とし、それに必要な物的用具を基盤とし、それらの思想、理論、技術や方法に従って人間形成の為に展開される社会的な仕組としての文化がある。

体育も他の文化的な、さまざまな活動と同様に人間が工夫し、作り出して来た、人間的な活動である。

身心二元論は主知主義をして、文化を芸術や宗教、科学、哲学などの高尚な精神的な事柄と考える狭い文化観と結びついたので、体育が文化とは異質な劣位な事柄として、捉えられていた。

文化の成立は、まず人間の生物としての資質は無力に等しいと云う事に基づいている。

生物は、生きて行く為、環境に適応しなければならぬ。人間も例外でなく、食物を獲得し寒さを防がなければならぬ。動物は牙と鋭い爪で獲物を捕り、厚い体毛と丈夫な皮膚で身体を守り、本能に基づく生体で生きて



行くのに比べ、生物として、まったく無力な人間は、生きる為の工夫と考案をし、共同のものとしなければならなかった。

R・リントンは

「文化とは、習得された行動と行動の諸結果との綜合体であり、その構成要素がある。一つの社会のメンバーによって、分有され、伝達されているものである」……と。

## 九、体育の組織と制度

a 教科としての体育は、全ての児童生徒に対して、身体活動を通して、広い意味での社会化を行うものだが、多くの場合、次の様な組織をもって行われている。

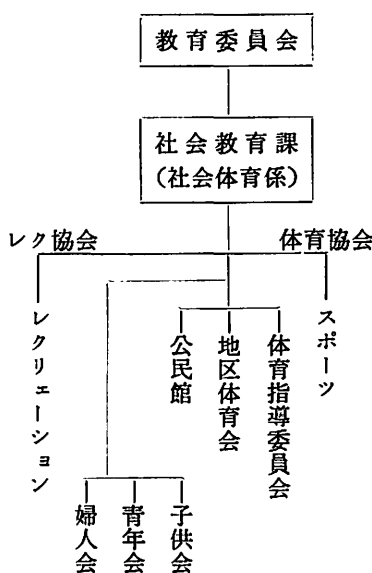
学校長↓体育主任↓教師↓クラス

b 地域社会のスポーツの場合

各地方公共団体内には、スポーツに関係する集団や機関が、量と質は違っても、必ず存在する。教育委員会や公民館等の行政機関もある。これらが集団や機関の流一を図り、その連絡調整を行ない、地域住民のより広範なスポーツ活動を効果的にするための組織が作られている。

体育社会学についての一考察（山田）

る。



c 制度

体育は、スポーツやダンス等の運動文化を介して、成員が社会化される過程であるが、体育的行為の規範があり、個人的、社会的欲求を充足する。

スポーツ行政に必要な法律は、「学校教育法」に対応して制定された、「社会教育法」一九四九年六月十日と、一九六一年六月十六日の「スポーツ振興法」の二つがある。

社会教育法に含まれているスポーツや、レクリエーション

## 体育社会学についての一考察（山田）

ヨン活動の趣旨を一層生かし、一層振興する為に、立法化された特別法がスポーツ振興法である。

### 十、使命と役割

体育を社会学的に研究する事により、体育学の基礎的、理論的研究に貢献する事になり、教育社会学に役立ち、更に合理性を高め、問題の解決に役立てる実践的、応用的役割を果す事にある。

#### a 応用と実践

科学の究極的目的は現実の問題に貢献し、絶えず変化する社会の問題に対処する態度が要求される。科学的研究は必ずしも、現実の解決に役立つとは限らない。

科学は、客観的にあるがままの姿をとらえる事が本来の使命であるからである。従って、科学的に研究された成果が結果として、現実の問題解決に役立つと云う事になる。

故に、教育社会学の研究は、まず理論的、客観的研究が先行すべきであるとされている。

体育社会学は、実践的問題に貢献しなければならぬ。

#### 参考文献

- 宗像誠也『教育研究法』（昭和二十五年・河出書房）  
竹之下休蔵・菅原禮『体育社会学』（昭和四十七年・大修館）  
中島豊雄『地域スポーツ集団の社会学的研究』（昭和四十七年）名古屋大学教養部 紀要十六輯  
菅原禮『体育社会学入門』（昭和五十二年・大修館）